

# 言語活動の充実を授業の中でどのように取り入れるか

新課程では、各教科・領域での「言語活動の充実」が明示されている。

しかし、授業で具体的に何をどのように工夫すればよいのか、明確になっていない学校は多い。

今号では、「総合的な学習の時間」を軸に、授業の中で言語活動を工夫している三重県立神戸高校の取り組みを紹介する。

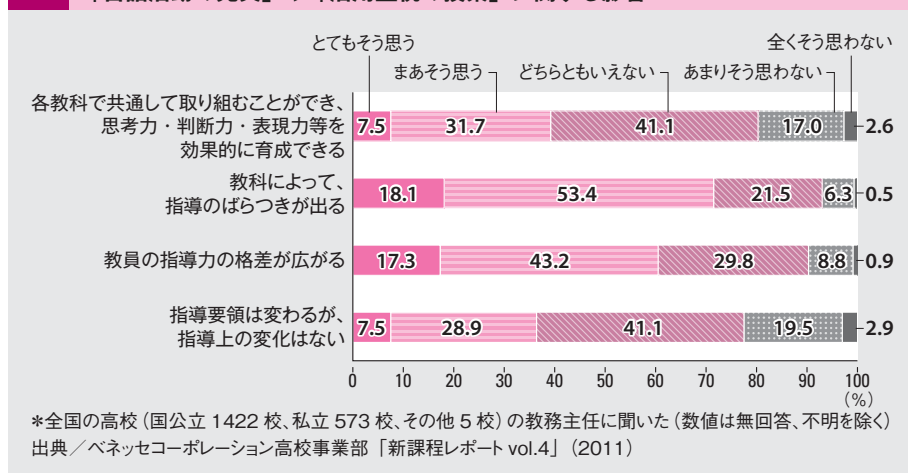
「言語活動の充実」は  
思考力などの育成につながるのか

新課程では、生徒の思考力・判断力・表現力などを育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動が重視されている。そして、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実することを明示している。

しかし、調査データによると、言語活動の充実や活用を重視した授業が、思考力・判断力・表現力を効果的に育成できると捉えている教師は少なく、「教科によって指導のばらつきが出るのではないか」「教員の指導力の格差が広がるのではないか」と懸念している教師は多い(図)。

論理や思考といった知的活動の基盤であると共に、コミュニケーションや感性、情緒の基盤となる言語力を

図 「言語活動の充実」や「活用重視の授業」に関する影響



育てる活動を、各教科、領域の中で効果的に取り入れていくにはどうすればよいのだろうか。

次ページから、三重県立神戸高校が「総合的な学習の時間」や科学学習で行っている言語活動について紹介する。

三重県立神戸高校

本質を問うテーマのグループワークで  
論点をつかみ、要約する力を育てる

進路学習と関連付けながら  
「表現力」を育成

三重県鈴鹿市に位置する三重県立神戸高校は、2011年度、2年生で言語活動の充実に向けた取り組みに着手した。同校は1コマ45分×7時間の授業を実施しており、毎週水曜日の6時限目にある「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）と、7時限目のLHRを活用し、年9回の「表現トレーニング」のプログラムを組んだ。

「志望理由書を書く」ことを最終目標として、「学ぶことの意味」「論理」「コミュニケーション」「働くことの意味」「科学技術」といっ

たテーマを設定して授業を進めた。その理由を、当時2年生担任で活動を主導し、現在1年生主任で国語科の今田美千代先生は、次のように説明する。

「この時期の高校生は、第三者に自分の考えや感情を出すことがなかなかしません。そこで、テーマは生き方や人とかかわりなど、2年生で進路を具体的に決めていく時期にこそ考えてほしい、人としての本質を問うような内容としました。自分にとって必要と感じ、感情移入できるような内容であるからこそ、深く読み取ることができ、自分の考えを伝えたい、表現したいと思うものです。」

例えば、『働くことの意味』では、普段の授業であまり発言しない生徒が、生き生きと自分の考えを発言していました。『表現トレーニング』は、表現力の育成だけでなく、進路学習や人権学習など他の活動とも連動させました。

毎回の活動は、テーマに即した課題文を読み、生徒個々で要約や意見の記述などの問題に取り組み「個人ワーク」と、課題文やテーマについて4〜5人で話し合う「グループワーク」をバランスよく配置した。教材は、ベネッセの「表現サポート」(\*)を土台とし、自校の生徒の実態に合わせて実施時間を増やしたり、順番を変えた



三重県立神戸高校  
今田美千代  
いまだ・みちよ  
教職歴25年。同校に赴任して8年目。1学年主任。国語科。

三重県立神戸高校

◎2012年度で創立92周年を迎えた伝統校。授業を1コマ45分の7時限とし、学習指導の充実と特別活動の活性化を図る。◎全日制／普通科、理数科／共学／1学年約320人  
◎2012年度入試の合格実績（現浪計）／国公立大は、東北大、名古屋大、三重大などに96人が合格。私立大は、中京大、南山大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ616人が合格。

りするなどの工夫をした。

「大学の志望理由書を書く授業では、実物の推薦入試の出願書類を活用しました。実際の出願を想定して書くことで、より真剣に取り組みたいと考えたからです。書いた志望理由書は、新3年生の担任団に渡して進路資料にしてもらうことも伝えました。授業中に書き終えられなかった生徒もいますが、提出期限を聞いてくるなど、狙い通りに生徒は真面目に考えていました」（今田先生）

副担任が活動を進める体制とし  
教師全員で指導に当たる

活動は副担任が中心となって進

\*ベネッセコーポレーションの低学年向け小論文・表現学習教材。書くことを通じて、高校生の「考え、伝える力」を育成することを目指している

図1 2011年度「表現トレーニング」第5回の指導案

2年生総合学習指導案 (12月7日)		
<p>○ 本時のテーマ ……「働くことの意味」            (題名) 「きみはなんのために働きたい？」            (指導目標) ・社会人の声などを通じて、働くことに対するイメージをつかむ。            ・自分は将来働くうえでどんなことを大切にしたいかを考える。</p>		
<p>○ 準備物            ・表現トレーニング教材：「表現トレーニング2」(P28～31)            「高校生の論点」(P26～29)</p>		
<p>● グループワークについて            ・4人程度で机を合わせてグループを作る。(近くの席の生徒同士でよい)            ・グループの進行役を決めておく。(出席番号が早い生徒、右前方の生徒など)            ・留意事項：怒いづいたことは積極的に発言する。            友達の意見は尊重する。最後まで聞く。            話し合いのテーマから外れないように注意する。</p>		
○ 展開		
内容	詳細	教材/備考
導入 (8分)	Q1・2：個人ワーク (計6分) ①仕事を通して得たいものとその理由を書く。 ②『高校生の論点』P26を読み、気づいたことなどを書く。	Q2 = 「共感シール」の利用
展開 (30分)	③ Q3：個人ワーク (5分) 『高校生の論点』P27の社会人の声を読み、印象に残ったところ等を書く。 ④ Q4：グループワーク (5分) 4人ぐらゐのグループで、Q3で書いた内容を共有する。 ⑤ Q5：個人ワーク (10～15分) 『高校生の論点』P28～29を読んで、ワークに取り組む。(メインのワーク。時間は多めに。) ⑥ Q6：グループワーク (5分) → Q5での意見を共有する。(時間が足りなければ割愛可。) ⑦ Q7：個人ワーク (5分) 読んで、ワークに取り組む。	Q4 = 友達の意見をメモする。 Q5 = ワークで意見があまり出なかった場合、「朱入りガイド」の解答例を紹介する。 Q7 = ここで玄田さんの言う「自分探し」は、「自己理解を深めていく」ことであることを補足する。
まとめ (5分)	⑧ Q8：個人ワーク (5分) これまでのワークも踏まえ、働くことについて考え、記入する。	時間があれば、P31の「まとめ」の欄に感じたことを書く。
<p>* 冊子「表現トレーニング2」を回収し、検印を押しておく。</p> <p>* 「表現トレーニング」P32・33『高校生の論点』P30・31 委 尚中「協働力」より)の「発展」にも取り組んでおくと良い。</p> <p>★ 「発展」に取り組む、冬休み前までに提出する人は、<b>連絡してください!</b> (提出先: )</p>		

指導案は教科指導と同じように進行の順序と所要時間などを示し、グループを作るポイント、活動中に生徒に伝えてほしいことなども入れて、副担任が戸惑わずに進行できるようにしている \*学校資料をそのまま掲載

め、担任がサポート役となる体制とした。担任の負担軽減になると同時に、言語活動を全教師で行い、その意識を浸透させるためでもある。

指導案は、「表現サポート」の教師用資料を基にして、各回分を今田先生が作成した(図1)。活動を進める際、副担任が迷うことがないように、活動の手順をきちんと説明し、生徒への声掛けが必

要な場合や声の掛け方などを具体的に示した。同じ教材を使ってもクラスによって進度は異なるため、授業内に終わらせてほしい工程も指示しておき、出来なかった部分は宿題にすることとした。

「言語活動は、国語科の教師でないと指導できないのではないかと考える方もいます。どの教師も抵抗感なく、無理なく実施できるように、指導案はA4判1枚に簡潔

にまとめ、指導案通りに進まなかった場合の対処法も明記しました。また、授業後には先生方に行具合などを聞き、次回に向けての改善点を探っていきました(今田先生)

**最後まで諦めず  
粘り強く書く姿勢が身に付く**

1年間の活動の成果として、今田先生は生徒の書く姿勢が変わった点を挙げる。

「前年度は小論文模試を2回行いましたが、時間内に書き終えられなかった生徒は、2年前前に行った小論文模試の時よりも少なくなりました。また、3年生となった本年度に行った小論文模試でも、生徒は最後まで粘り強く書いていたと3学年団か

ら聞きました。生徒の書くことへの抵抗感は薄れたようです」

また、年度末に生徒に行った総合学習の評価アンケートでは、心に残った活動に「表現トレーニング」を挙げた生徒は6割に上った。その理由について、生徒がグループワークを面白いと感じているからではないかと今田先生は話す。

「生徒の友人関係は意外に狭く、クラスに40人いても親しく話すのはほんの数人です。同じ教室で授業を受けているけれども普段は接点のないクラスメイトとグループを作ること、対話の機会を提供すると共に、仲間がグループワークで意見をうまく発表したリ、物事を深く考えていたりする姿に、生徒は自分も頑張らなければと触発されているようです」

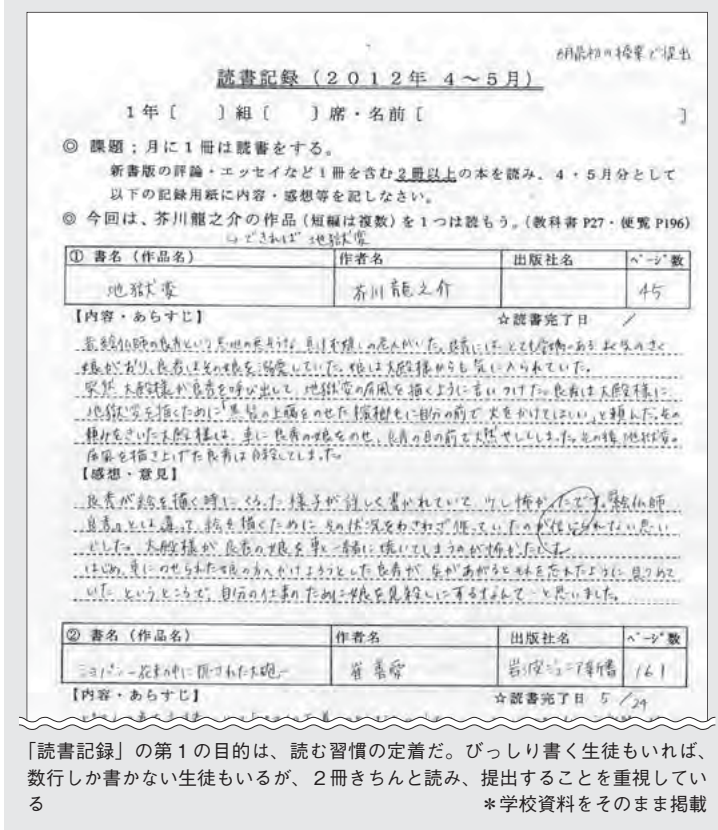
**考える、話す、書く活動を  
授業に少しでも取り入れる**

12年度は、今田先生が学年主任を務める1年生でも、総合学習とLHRの時間に全5回の「表現トレーニング」を行う。

「前年度の2年生の成果を受け



図2 1年生の「読書記録」記入例



て、新1学年団に同様の活動を提案したところ、教師全員の合意を得て実施することになりました。「こうした活動は小学校から実践すべき」との声もあり、言語活動に課題意識を持っていた先生が多くいました。1年生では、筆者の意見と、それを補強する具体例や根拠をつかめるような、読解力と要約力の育成が中心になります」

今田先生は、担当する国語の授業でも、言語活動を意識した取り組みを始めた。その1つは「読書記録」だ(図2)。2カ月に2冊の本を読み、内容の要約と意見をまとめる。1冊はその時の授業に關連した本を、2冊目は新書を奨励している。また、古文の授業では、登場人物がなぜそのような行動を取ったのかを問いつけ、周りの生徒と話し合わせる活動を行うようにした。

「新課程で言語活動の充実が盛り込まれたこともありすが、『表現トレーニング』での生徒の様子を見て、教科指導でも考える場面や話し合う場面を意識して取り入れるようにしています。生徒が教師の話聞いて理解するだけでなく、能動的な活動を積極的に取り入れることによって、生徒の授業内容への理解は更に深まり、授業への関心が高まると感じています」

こうした動きは、他教科にも広がりがつつある。現代社会では、定期考査で毎回200字程度の論述を出題。1年生のあるクラスは、金曜日を「作文の日」として、2週に1回のペースで、その週の出來事を題材とした作文を原稿用紙1枚に書く活動をしている。

「言語活動の充実とまではいかなくても、『考える』『話す』『書く』などの活動は、国語だけでなく他教科でも、授業にちよつとした工夫で取り入れることは可能です。この積み重ねが、生徒の授業態度を受け身なものから主体的なものへと変化を促せるのではないかと期待しています」

**「論点を把握する力」の土台を育成する**

言語活動をさまざまな教育活動に取り入れ始めた神戸高校。高校での目標を、どのように捉えているのだろうか。

「どんな話でも文章でも、論点に気付けば筆者の意見とその理由も整理できます。しかし、社会に出れば話は1回限りで、授業のように何度も課題文を読む機会はありません。高校では、瞬時に論点を把握できる力の土台を作り、大学での学びに橋渡しが出来ればと思います」(今田先生)

講演や模擬授業の後に内容を要約させる活動も検討している。

「同じ話を聞いたとしても、重要となるポイントは人によってさまざまです。スキルを身に付ける場として模範解答がある『表現トレーニング』などで練習をし、そのスキルを実践する場として、講演や模擬授業などを受けて、自分にとって良かったポイントをまとめさせるような活動を出来ればと考えています」(今田先生)